トロクバーリント実験学校／バーリント・マールトン学校

―日本語教育の歴史と現状―

若井誠二（カーロリ大学）
ナジ・アニタ（城西国際大学）

【要約】
トロクバーリント実験学校は、1987 年に初等教育課程で日本語教育を開始した、ハンガリー唯一の体制転換前からの初等・中等教育機関である。革新的教育システム ÉKP の実践校として設立され、外部支援に頼らず独自に日本語教育を展開してきた。体制転換後の実験学校廃止、学校国立化、管理体制の中央集権化など困難に直面しながらも、現在まで地方で唯一、第二外国語として日本語教育を継続している貴重な存在である。

0. はじめに

ハンガリーにおける日本語教育は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国時代の 19 世紀末に始まった。しかし、日本語教育が本格的に拡大し始めたのは社会主義体制末期の 1980 年代であり、その動きが加速したのは 1989 年の社会体制転換以降である。特に、初等・中等教育機関における日本語教育は、この体制転換後に導入されたものがほとんどである（Hidasi 2017, Székács 2017）。

その中で、トロクバーリント実験学校（以下、実験学校）は極めて特異な存在である。同校は、社会体制転換前の 1987 年に日本語教育を開始した唯一の初等・中等教育機関であり、ハンガリー人教師が主導し、JOCV（青年海外協力隊）などの外部人的支援を受けずに独自に教育を展開してきた。また、現在においても、ブダペスト以外で唯一、日本語を第二外国語として継続的に教授している。

このように、同校の事例は、ハンガリーにおける日本語教育史の中で非常にユニークであり、外国語教育と社会的変化の関係を考察する上で重要な示唆を与える。そこで、本論文では、同校における日本語教育の開始から現在に至るまでの歴史を辿り、ハンガリーの教育制度改革や社会的変化が同校の日本語教育に与えた影響を明らかにすることを目的とする。

1. トロクバーリント実験学校とは

トロクバーリント実験学校は、教育学者ジョルナイ・ヨージェフ[1]（Zsolnai József、1935-2011）が 1970 年代から確立した革新的な教育システムを実践するために設立された学校である。このシステムは、NYIK（Nyelvi, irodalmi, kommunikációs program：言語、文学、コミュニケーションプログラム）と ÉKP（Értékközvetítő és Képességfejlesztő Pedagógia：価値伝達・能力開発教育）という二つの柱から成り立っている。

NYIK は、ドラマ化・演技・ロールプレイを導入した母語教育プログラムであり、1974 年から 1978 年にかけてロマ住民が居住する小さな集落学校で、社会的に不利な立場の児童への教育支援として導入された。当時は、教育内容、教授法、評価方法は国家が定めた標準カリキュラムに厳しく縛られてお

り、学校や教師が独自の教育思想に基づいてカリキュラムを設計する自由はほとんどなかった（Torgyik 2004）。しかしNYIKはその成果が評価され、1984年には教育大臣により初の公式代替カリキュラムとして認定された。

ÉKPは、このNYIKの指導法を他教科へも援用し、全日制学校用に再体系化した包括的プログラムである。その特徴は、生徒・教師・保護者の協力を重視し、教育課程を二部構成とした点にある。具体的には、午前中に主要科目（数学、自然科学、ハンガリー語・文学〔Anyanyelv〕）、午後に人形劇や民俗舞踊、環境文化、芸術といった感性を育む活動を配置し、学校生活全体を包括的な教育の場として構築していた（Paksi 2011）。

1982年度、ジョルナイは実践的有効性を探るための試行として、ブダペストの5校とブダペスト近郊の自治体の2校で1年生にÉKPによる実験クラスを導入した。後者の１つの学校があるトロクバーリントは、ブダペストから西15kmに位置する町であるが、ジョルナイ夫妻がこの町で不動産を購入したことがきっかけで実験クラスが導入されることとなった。同校では、ジョルナイの妻でありNYIK、ÉKPに詳しいMátyási Mária（マーチャーシ・マーリア）が授業を担当した。

ÉKPを導入した7つの学校の実験クラスはいずれも成果を上げたが、ジョルナイは、それだけではハンガリーの教育全体の根本的な変革には不十分だと考えた。そこで1985年度にトロクバーリントの学校を「トロクバーリント実験学校」とし、1年生から8年生までのすべてのクラスにÉKPを導入した（Zsolnai 2002 : 272）

２.日本語教育の開始

トロクバーリントは、2003年に工業団地ができ、2007年には市となったが、1980年代には、人口が1万人程度の小規模な地方の町であった。当時、ハンガリーではロシア語が必修であり、特に初等学校でロシア語以外の外国語が教えられることは非常にまれであった。ただし、同地はドイツ系ハンガリー人が多く定着した地域であったため、例外的にドイツ語教育が行われていたという背景があった。

しかし、ジョルナイは、エリートの家族でもなく、経済的にも決して豊かではない子供も通う、地方の学校において自身の教育システムの効果を証明する手段として、欧州言語以外の言語教育の可能性を模索した。そして、1984年に日本語教育を行っていたエトヴォシュ・ロラーンド大学や日本大使館との50回に渡る交渉を重ね、日本語教育スタートの道筋を作った（Zsolnai 2002 : 290）。

1987年度、1982年度からジョルナイの妻であるマーチャーシが教えてきたクラス（当時6年生）のうち、成績の良かった12名を対象に日本語クラスがスタートした。スタート時に日本語を教え始めたのは、ハンガリー政府給費留学でハンガリー科学アカデミー歴史学研究所に留学していた日本人J1であった。しかし、同年度途中に数年間日本滞在経験のあったハンガリー人H1が教授陣に加わった。翌年度の1988年度からはH1に代わり、外交官を夫に持ち日本にも滞在した経験を持つH2が日本語を教え始めた。これに伴い、1988年度以降、下の学年でも日本語が教え始められた（Markó 2017）。当時ハンガリー初等教育8年、中等教育4年の8-4制を敷いており、マーチャーシが担当するクラスも1989年度末に8年生を終了したが、1990年度には実験学校内で中等部も始まり、同時に中等部においける日本語教育もスタートした。

実験学校での日本語の授業はÉKPを意識して行われ、外国語教育を取りまとめていたフランス語教師が作成したプログラムに沿って実施された。言語だけではなく、文化理解も重要視された。具体的な活動例として、童謡や歌、数え歌を利用した発音指導、非言語コミュニケーション（ジェスチャー）も

重要視したロールプレイング、年中行事や日本の日常体験（おにぎりを一緒に作る）、時事問題の活用、地理や自然、スポーツ（柔道の授業も行われていた）などが挙げられる（Kiss 1992）。

３．自力運営による日本語教育の継続

社会体制転換後の 1991 年、ブダペストに国際交流基金の事務所が設立された。そして、1992 年から 2007 年まで、青年海外協力隊（以下、JOCV）として計 62 名が日本語教師としてハンガリーに派遣された。派遣先は、ブダペストの初等教育機関 1 校、中等教育機関 5 校、高等教育機関 2 校、地方の中等教育機関 3 校、高等教育機関 4 校であった。一方、地方の初等教育機関には隊員が派遣されず、地方の中等教育機関も、派遣校のいずれも後に日本語教育が廃止された。

表１．ハンガリーにおける JOCV 日本語教師隊員派遣先

初等教育機関	ブダペスト	1 校	2025 年度現在、日本語教育継続
中等教育機関	ブダペスト	2 校	1 校で 2025 年度現在、日本語教育継続
	地方	3 校	
高等教育機関	ブダペスト	2 校	2025 年度現在、日本語教育継続
	地方	4 校	2 校で 2025 年度現在、日本語教育継続

（在ハンガリー日本国大使館 年不明）

一方、実験学校は JOCV が派遣される前より、ハンガリー人教師と日本人教師の組み合わせによる体制が確立していた。また、H2 が外交官の夫の仕事で日本に滞在していた一時期を除き、ハンガリー人教師がリードし、日本人教師がそのサポートに回るという体制が整っていた。このため JOCV 隊員の受け入れを行わず、また JOCV 撤退後も日本語教育が廃止されることもなかった。

表２　日本語教育開始から JOCV 完全撤退時までの実験学校／バーリント校の日本語教員

年度	コース責任者	
1987	J1→H1	J1
1988-1989	H2	J1
1990-1991	H2	J2
1992-1995	J2	H3
1996	J3	H4
1997	J3	H5

1998-2005	H2	J3
2006-2007	H2	J4

４．環境の変化

４．１ 実験学校の廃止

ハンガリーでは 1989 年の体制転換後、教育の自由化が進み、教会立の初等・中等学校も開校（再開）されるようになった。一方、実験学校は社会主義時代の遺物とみなされ、国からの予算が与えられなくなった。

ジョルナイは実験学校をエトヴォシュ・ロラーンド大学付属の実験実習学校とするよう動き、国から大学側に予算をつけることに成功した。こうして 1996 年度に同大学の付属校となった。しかし、NYIK・ÉKP に沿った教育を続けたい実験学校と、そうではない大学との間で折り合いがつかなかった。

1998 年度からは、ジョルナイが 1995 年度より教員養成センター長・教育学科長を務めるヤヌス・パンノニウス大学（現ペーチ大学）の付属実験学校となった。しかし、これも 1 年しか続かず、1999 年度からは自治体立の学校となり、ジョルナイも学校を離れ、2000 年度にはバーリント・マールトン初等・中等学校（以下、バーリント校）へと名前も変わった（Bálint Márton Általános Iskola és Gimnázium 年不明）。

バーリント校では、NYIK・ÉKP に沿った教育は行われなくなり、人形劇、民俗舞踊、環境文化、柔道、芸術などの科目はなくなった。しかし、日本語は第二外国語として残った。

４．２ 中等教育を取り巻く環境の変化

ハンガリーでは 1993 年度より日本語が中等教育機関（高校）の卒業試験の科目の 1 つとして認められるようになった（1993. évi LXXIX. törvény a közoktatásról）。その後、2005 年度からは教育システムが変わり、外国語学習には CEFR が取り入れられるようになり、卒業試験も「上級」と「中級」の 2 つに分かれるようになった。外国語上級卒業試験で 60%以上の成績を収めると、国家中級（B2）試験合格の資格が与えられるようになった（100/1997. (VI. 13.) Korm. rendelet az érettségi vizsga vizsgaszabályzatának kiadásáról）。

2005 年以降も日本語は「上級」「中級」のいずれも受験が可能であったが、2011 年度に急に日本語の「上級」試験が消えた（Oktatási Hivatal 年不明）。日本語上級卒業試験は 2015 年度に復活したが、この時期、上級試験が受験できなくなったことにより、中等教育機関における日本語の位置づけが下がり、日本語教育を断念する中等教育機関も現れた。

また、2006 年度にはボローニャプロセスが導入され、大学の入試制度も大きく変わった（2005. évi CXXXIX. törvény a felsőoktatásról 2005 年）。それまで大学日本学科は入学試験に日本語試験を置き、日本語既修者のみを入学させていたが、2006 年度以降は、各学科の入試科目は国により規定され、日本学科においても日本語が初級であっても入学できるようになった。2006 年度までは、中等教育機関で日本語を学んだ者は大学日本学科に進学する際に有利であり、実際進学する者も多かった。しかし、2006 年度以降は、日本語学習が進学とリンクしなくなり、日本語学習に関する中等教育機関の生

徒のモチベーションも変化した。

一方、バーリント校では定年退職した H2 から、教職課程を経て日本語の教員免許を取得した H8 が日本語コースを引き継いだ。上級日本語卒業試験が実施されなかった時期、そして、入試制度が変更した後も、バーリント校では H6 が中心となり、日本語教育が維持された（Czikkely 2022)。

表３　JOCV 完全撤退時から 2021 年度までのバーリント校の日本語教員

年度	コース責任者	
2007-2008	H2	H6
2009-2010	H2	H7→J5
2011-2013	H8	J5
2014-2016	H8	H6
2017	H8	H6→H9
2018-2020	H8	H9
2021	H8	H6

４．３ 日本語教育の縮小

政府は 2011 年に自治体の赤字を引き取る代わりに自治体立の学校をすべて国立化すると決め、2013 年 1 月 1 日に国立化した。学校の管理はクレベルスベルグ学校維持局が行うことになった。ただ 1 つのセンターがハンガリー全土のすべての学校の維持管理を行うことに問題が発生したため、2017 年に教育区センターがハンガリー全土に設置され、同センターが学校の管理・維持を行うようになった。以後、人事、カリキュラム、物品購入に至るまで、教育区センターが管理することとなり、校長の裁量権が大幅に減った（Imre-Erdős 2022)。

バーリント校では、入学試験を受けて中等部に入り日本語を学び始める者もいたが、多くは初等部で日本語を学んだ子が内部進学後に中等部で本格的に日本語学習を始めていた。2021 年度当時、初等学校の日本語教育は専門サークル（特定の教科や分野に興味を持つ生徒が参加する少人数制の授業）の形式で計週 9 時間実施されていた。しかし 2021 年度末に教育区センターより、初等部での専門サークルとしての日本語教育を中止するよう通達があり、初等部の授業が開講できなくなった。これに伴い、バーリント校における日本語教員も H81 名のみとなった。また、これに伴い初等部で日本語を学んだものが、中等部に進級することもなくなり、またバーリント校では、中等部入学後に生徒が複数ある第二外国語から 1 つを選択する制度を導入していることから、中等部における日本語授業参加者の確保も非常に難しくなった。

表 4　2022 年度以降のバーリント校の日本語教員

年度	コース責任者	
2022-	H8	

５．現状と展望

国際交流基金の 2021 年度調査によると、ブダペストでは中等教育機関 6 校で第二外国語として、同 4 校で専門サークルとして日本語の授業が行われている。一方地方では、日本語教育が行われている中等教育機関は 2 校しかなく、このうち第二外国語として日本語の授業が行われているのはバーリント・マールトンのみである（Japan Foundation 2021）。

2020 年代に入り、ハンガリーでも独学および家庭教師をつけて日本語を学ぶ学習者や、語学学校で学ぶ学習者が特に増加している。これらの学習者が中等教育機関の生徒であり、卒業試験として日本語の受験を希望する場合、第二外国語として日本語を教えている高校で 2 回に渡る卒業試験受験資格試験を受け、これに合格する必要がある。この点からも、地方で第二外国語として日本語を教えるバーリント・マールトンの存在は非常に貴重であると言える。

H8 は、日本語教育への関心を高めるため、学校内に日本語教室を設置し、生徒が日本語で学校を紹介するビデオを作成したりしている。また、ブダペストと違い、日本語母語話者と触れ合う機会が非常に少ないため、カーロリ・ガーシュパール大学、京都外国語大学、早稲田大学の協力を得て、日本語教育を専門とする大学生・大学院生がティーチング・アシスタントとして生徒や教師をサポートする体制を構築している。

６．おわりに

トロクバーリント実験学校／バーリント・マールトン学校における日本語教育の歴史は、ハンガリーにおける教育改革と社会変化の縮図である。1987 年度の開始当初、この学校の日本語教育は革新的な教育理念と強いリーダーシップに支えられていた。しかし、社会体制転換、実験学校の廃止、学校の国立化、管理体制の中央集権化という一連の変化の中で、日本語教育は大きな困難に直面してきた。

特筆すべきは、これらの困難にもかかわらず、学校が自力で日本語教育を継続してきたことである。青年海外協力隊に頼らず独自の教員体制を構築し、日本語上級卒業試験が廃止された時期も教育を維持し、初等部の授業が中止された後も中等部で日本語教育を続けている。

現状、教員 1 名（H8）ができることには限りがある。しかし、大使館、国際交流基金、ハンガリー日本語教師会、国際交流基金サクラネットワークがバーリント校の存在と努力に関心を持ち、地方における日本語教育の火を消さないようサポートし続けていくことが重要である。地方における日本語教育の継続は、ハンガリーにおける日本語教育の多様性と持続可能性を保証するものであり、その意義は極めて大きい。

謝辞

本論文の作成にあたり、貴重な資料をご提供くださいましたバーリント・マールトン初等・中等学校校長 Keszler Márton 氏に、心より深く感謝申し上げます。

参考文献

100/1997. (VI. 13.) Korm. rendelet az érettségi vizsga vizsgaszabályzatának kiadásáról (n.d.). https://net.jogtar.hu/jogszabaly?docid=99700100.KOR (Retrieved: 2026-01-11)

1993. évi LXXIX. törvény a közoktatásról (n.d.). https://net.jogtar.hu/jogszabaly?docid=99300079.TV (Retrieved: 2026-01-11)

2005. évi CXXXIX. törvény a felsőoktatásról (n.d.). https://net.jogtar.hu/jogszabaly?docid=A0500139.TV (Retrieved: 2026-01-11)

Bálint Márton Általános és középiskola (2007). A Bálint Márton Általános és középiskola évkönyve 2006-2007.

Bálint Márton Általános és középiskola (2008). A Bálint Márton Általános és középiskola évkönyve 2007-2008.

Bálint Márton Általános és középiskola (2009). A Bálint Márton Általános és középiskola évkönyve 2008-2009.

Bálint Márton Általános és középiskola (2009). A Bálint Márton Általános és középiskola évkönyve 2009-2010.

Bálint Márton Általános Iskola és Gimnázium (n.d.). Iskolánk története. https://balintsuli.hu/iskolank-tortenete/ (Retrieved: 2026-01-11)

Czikkely, Z. (2022). A magyarországi japánnyelv-oktatás igényéről. *Iskolakultúra*, 32(1), 101–115.

FilmHíradók Online (1991). Video material. https://filmhiradokonline.hu/watch.php?id=23808 (Retrieved: 2026-01-10)

Hidasi, Judit. (2017). Idegennyelv-oktatáspolitika és a japán nyelv oktatása Magyarországon 1990-2015. In Wakai, Seiji & Sági, Attila (Eds.), *Kortárs Japanológia II: Japánnyelv-pedagógia Magyarországon* (pp. 9–25). Budapest: Károli Gáspár Református Egyetem – L'Harmattan Kiadó.

Imre-Erdős, Szilvia (2022). Nyolc éve állami kézben az alapfokú oktatás. *Közjavak*, VIII. évfolyam, 1. szám, 3–7.

Japan Foundation. (2021). Survey Report on Japanese-Language Education Abroad 2021. Retrieved January 11, 2026, from https://www.japanese.jpf.go.jp/do/index

Kiss, Sándorné. (1992). Japán nyelv – magyar iskolában: a japán nyelv és kultúra oktatásának tapasztalatai a Törökbálinti Kísérleti Általános Iskolában. *Iskolakultúra*, 2(8), 20–28.

Oktatási Hivatal (n.d.). Központi írásbeli feladatsorok, javítási-értékelési útmutatók: Feladatsorok és javítási-értékelési útmutatók a közép- és emelt szintű írásbeli érettségi vizsgákon - 2005-től napjainkig. https://www.oktatas.hu/kozneveles/erettsegi/feladatsorok (Retrieved: 2026-01-11)

Markó, László. (2017). Interjú Kiss Sándorné Székely Ilonával. In Wakai, Seiji & Sági, Attila (Eds.), *Kortárs Japanológia II: Japánnyelv-pedagógia Magyarországon* (pp. 139–179). Budapest: Károli Gáspár Református Egyetem – L'Harmattan Kiadó.

Paksi, László. (2011). Egy élet az anyanyelv-pedagógia szolgálatában – a tanyasi iskolától a Magyar Tudományos Akadémiáig. *Anyanyelv-pedagógia*, XIV. évf., 1. szám.

Székács, Anna. (2017). A japánnyelv-oktatás története Magyarországon. In Wakai, Seiji & Sági, Attila (Eds.), *Kortárs Japanológia II: Japánnyelv-pedagógia Magyarországon* (pp. 26–57). Budapest: Károli Gáspár Református Egyetem – L'Harmattan Kiadó.

Torgyik, Judit. (2004). Az alternatív pedagógia helyzete hazánkban 1945-től napjainkig. Neveléstörténet, 1(1), 81–91.

Zsolnai, József. (2002). Vesszőfutásom a pedagógiáért – Egy pedagógus-életút sikerei és botrányai. Budapest: Nemzeti Tankönyvkiadó.
在ハンガリー日本国大使館（年不明）「ハンガリー青年海外協力隊派遣実績（バーチャート）」PDF 資料 https://www.hu.emb-japan.go.jp/download/sonota/071110JICA03_jp.pdf （最終閲覧日：2026 年 1 月 10 日）

[1] ハンガリー語の姓名順は日本と同じく「姓・名」